

地域の力で災害多発時代に備える

地域防災力充実強化大会 in 奈良2022 会場/奈良県コンベンションセンター

近年、日本列島で洪水や地震など自然災害が多発している。紀伊半島大水害から10年が経過し「地域防災力充実強化大会 in 奈良2022」(総務省消防庁・奈良県・奈良市・公益財団法人奈良県消防協会主催)が11月26日、奈良市の奈良県コンベンションセンターで開かれ、消防関係者や地域住民ら約1300人が参加。当日は基調講演、パネルディスカッション、事例発表などが行われた。吉本興業所の芸人からも参加し、会場を大いに盛り上げた。

パネルディスカッション 災害多発時代の消防団と自主防災組織のあり方 — 自然災害から身を守るために —

ヒデ 近年は地震、洪水など災害多発時代と呼ばれ、平成23年には紀伊半島大水害による甚大な被害が発生し多くの尊い命が奪われた。また今後30年以内に南海トラフ地震が起こる確率は80%ともいわれている。それぞれの立場でも災害に備える取り組みは、

仲川 大規模災害はいつ発生するかわからない。備えておかなければならない。いざというときに、いかに落ち着いて行動できるか大事だ。奈良市では総合防災訓練を10月30日に実施し、市民約1万人が参加した。避難所開設訓練では市の職員と地域の住民が開設と運営ができるように訓練して、屋内にテントを設置して被災者のプライバシーを確保しストレスを軽減するよう対策もしている。

中室 消防団員は地域の住民が構成している。防災訓練でも災害時でも、地域で目が届く範囲で活動できるので、機能的に活動することができ、充実を図るため、機能別消防団を来年3月に発足させる計画だ。ドローンによる情報収集活動の展開が期待されている。課題は少子高齢化で団員の担い手をどうするかだ。

伊藤 奈良市女性防災クラブは、23地区で1200名のクラブ員があり、防火・防災に関する啓発活動を行っている。活動のうち地域の高齢者への対応が特色だ。一人

◆コーディネーター
パネルティ・ヒデさん
◆パネリスト
仲川 げん氏 (奈良市長)
中室 貞浩氏 (奈良市消防団長)
伊藤 俊子氏 (奈良市女性防災クラブ連合会長)
植村 信吉氏 (奈良県防災士会副理事長)
菅 磨志保氏 (関西大学社会安全学部准教授)



パネルティ・ヒデさん

仲川 奈良県は歴史的に大規模災害がなく大丈夫という意識が市民の間に広がっている。いつ何が起ころうとも不思議はないという意識を持つことが大切だ。少子高齢化によって人口の減少が続いている。今年1月に成人式を迎えた若者は3500人だったが去年奈良市で生まれた子供は1900人。20年後の新人は約半分に減る。消防団員も減少傾向にあり、災害が起きた際に対応する人口のバランスが悪くなっている。

中室 人口減少と少子高齢化で若い団員が入ってこないのが問題。消防団員も高齢化しており消防団の活動を理解していただくことが大切だ。商店街で消防団を応援する店になってもらい、認知してもらい活動を進めたい。また自主防災組織との連携も深めたい。

伊藤 子ども防災防教室で紙芝居を通して防災について学べるようにしている。幼稚園のお迎えの時間帯に開催して、保護者にも見てもらうことで啓発に努めている。クラブ員は20歳から80歳までいて、それぞれ頑張っているが、なかなかクラブ員が増えないのが実情。

植村 私が感じるのは、防災士個人の力量の差があること。地域での防災体制が充実している地域とまだ十分でない地域があること、防災活動の担い手が高齢者が圧倒的に多く、若い人が少ないのが課題である。

菅 コロナ禍以降、被災地外部からの支援が入りにくくなっている。まずは自分たちの地域で対応できることを考え、できない対応は外部から専門性を持った団体の力を借りる必要がある。近年、専門性を持った民間団体が増えており、ネットワークを作った活動を展開している。例えば高圧洗浄機を使って対処する技術系のチームや避難所で避難支援を行う福祉専門職のチームもある。そういった仕組みを活用し、自分たちでできることを実践していくことが重要になる。



仲川 げん氏



中室 貞浩氏



伊藤 俊子氏



植村 信吉氏



菅 磨志保氏

基調講演 文化財を保有する社寺が期待する 防災について



法相宗大本山薬師寺 副住職 生駒 基達師

奈良には世界遺産に登録された東大寺、法隆寺、興福寺など有名な寺院が多い。東大寺は聖武天皇が疫病や飢饉を憂い、その責任は「われ一人にあり」とお考えになつて大仏の建立を祈願された。薬師寺も世界遺産の一つで、東西2つの塔が並立する白鳳時代の伽藍を擁している。

東大寺ではお水取り、薬師寺では花会式という伝統行事があり、これが終わると奈良にも春が訪れる。薬師寺の曳馬式では松明を掲げて煩悩を焼き尽くし、内なる鬼(煩悩)を追い払う。赤々と燃える松明を掲げて振り回すので、火災にならないよう地元の警察や消防の協力を得て営んでいる。「火の用心」というが、かつては「火乃要慎」と書いた。心を慎むのである。薬師寺の本尊は日光菩薩・月光菩薩・薬師如来の薬師三尊だ。銅を20ト使用し、台座にはシルク

ロードを通じて伝わったペルシャやギリシャの文様が刻まれ、当時の奈良が国際文化都市であったことを思はせている。東西の三重塔には高さ34尺の屋根の頂部に高さ1.9尺の水煙が置かれている。そこには人が24体彫刻されており、水煙は火災からの守護を願ったものである。薬師寺は火災や台風で伽藍の多くが消失し、師である高田好胤師は「昭和の伽藍復興」を志し、般若心経のお写経勧進によって復興

を行った。それにより金堂、西塔、大講堂などが再建された。阪神淡路大震災の際には電車を乗り継いで神戸市に救援物資を持っていったり、ミニバイクに水を積んで持ってきた。東日本大震災の際には被災地からさまざまな救援物資の要請があった中、亡くなった方のお祈りをすする線香をひとつひとつで寄付金と共に現地に届けたこともあった。茨城県潮来市にある薬師寺東閣東別院では液状

化現象の被害に遭い16棟の建物が4棟を残して崩れた。昭和24年1月26日に法隆寺金堂から出火し貴重な壁画の大半が焼損した。この火災を契機に文化財保護法が制定された。一旦木造建築が燃えたと火災は難しい。首里城の火災も本殿から出火した火を消すことができず脇殿を含む9棟が焼け落ちた。親孝行と火の用心は灰にならぬ前」といわれる。文化財の防火は地域の理解と協力が欠かせない。

近所付き合いで共助を向上 自主防災組織との連携を深める 「向こう三軒両隣」で細やかな対応 まずは自分の無事確保が大切 被災地内外の力で課題を解決

仲川 近所付き合いで共助を向上

中室 自主防災組織との連携を深める

伊藤 「向こう三軒両隣」で細やかな対応

植村 まずは自分の無事確保が大切

菅 被災地内外の力で課題を解決



事例発表① 紀伊半島大水害から10年 消防団と地域住民との連携



紀伊半島大水害から10年経ったが、いまだに鮮明に記憶に残っている。紀伊半島3県で死者・行方不明者88人の犠牲者を出した。斜面崩壊が3000カ所以上のほり、山崩れ、河川氾濫によって生活道路が寸断され孤立した集落が出た。とりわけ深層崩壊といわれる斜面の表面だけでなく中の奥深いところから土砂が崩れ削り取られる被害が発生。流出した土砂は80万立方メートル、東京ドーム80個分の量だった。人命救助には自衛隊、奈良県警、県内各消防本部など多くの機関や団体が出動した。そしてその中心となったのが消防団だ。五條市消防団は人員506人で22分団が7方面隊に組織されている。また女性消防団と

事例発表② 未来へ繋げる地域防災力 — 私たちが担います —

奈良市済美地区(奈良市中部の済美小学校の校区)人口1万9000人、南端にJR京終駅がある。済美地区自主防災防犯協議会は役員23人、地域内6カ所に防災倉庫を設置している。毎年9月に防災講座、11月に自主防災訓練を行い、奈良市総合防災訓練にも参加している。地区内に文化財があり、仏像の搬出訓練なども行っている。課題は役員の高齢化が進み、若者が加入しないこと。後継者を育成するために済美こどもクラブを2019年に立ち上げた。小学校4年生から6年生で、放課後の午後4時から5時まで、済美小学校で活動している。メン

地域防災の人材育成めざして 済美地区自主防災防犯協議会 池口 光隆氏

バーは発足当初は男子3名女子4名の7名だったが、現在は男子4名女子15名の19名にまで増えた。学校で防災活動を行っており、放課後に参加しやすい環境にある。2020年には奈良市消防局の出初式にも参加した。訓練内容は流水体験、防火予防啓発、消火ホースでの放水、被災者救出、負傷者搬送、応急手当、ロープワーク、空き缶を使った炊飯の各訓練を行っている。これらの取組を通じて、子どもたちが防災の知識を身に付け、意識を高めてくれば、地域における持続可能な防災活動と人材育成につながっていくと思

主催者挨拶 各界各層の 連携と理解を

本大会は地域防災力の向上を目的に、各界各層が連携と理解を深めることを目的として、奈良県では平成23年に紀伊半島を中心とした大規模な被害が発生した。人命と生活を守るためには、地域住民の結束が大切だ。本大会では著名人をゲストに迎え、防災について楽しく学んでもらい、理解を深め地域防災力の向上につなげてほしい。



総務省消防庁地域防災室長 佐藤 茂宗氏